

発刊に寄せて

超高齢社会を迎えた我が国では、高齢者のQOLの向上が重要かつ喫緊の課題です。夜間頻尿は泌尿器科領域において最も頻度が高く、かつQOLを低下させる代表的な主訴であります。夜間頻尿の原因は単一なものではなく、多尿、膀胱蓄尿障害、睡眠障害などの原因が複雑に絡み合うため、系統的なアプローチによる個別化医療が望まれます。主たる原因によっては対応する専門医も変わってきます。最近の研究では夜間頻尿が生命予後にも関連することが明らかになり、適切な治療介入が必須であることが認識されるようになってきました。

夜間頻尿診療ガイドラインの初版が2009年に出版されて11年が経過しました。夜間頻尿の病態の複雑さへの理解が深まると同時に、新しい薬剤も登場しました。今回の改訂は実地臨床に携わる医師からの強い要望を反映しています。構成についても初版とは異なり、CQ形式を取り入れ、29の実践的なCQと回答および推奨グレードが記されています。さらに、夜間頻尿の定義と関連する用語の解説、病因と発生機序、疫学、QOLについて解説されています。最後に夜間頻尿の診断と治療についても各々章が設けられています。

本ガイドラインの最大の特徴は診療アルゴリズムを画一的なものにせず、一般医向けのもの、泌尿器科専門医向けのものに分けたこと、さらには多尿と夜間多尿の有無で分類したことです。夜間頻尿の原因は複雑であり、多尿、膀胱蓄尿障害、睡眠障害などの原因が複雑に絡み合う糸をほどいていく過程をアルゴリズムが可視化しています。是非、活用して下さい。

今回、日本排尿機能学会の作成委員会が中心となって、この数年の知見を取り入れ学問的にしっかりと構成されているだけでなく、使いやすさにも配慮した素晴らしいガイドラインが出来上がりました。日本泌尿器科学会を代表して敬意を表したいと思います。このガイドラインが泌尿器科専門医だけでなく、初期診療に携わる医師、看護師、保健師の方々に広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、本ガイドラインの作成にご尽力をいただいた吉田正貴委員長ならびに委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。

2020年4月

一般社団法人 日本泌尿器科学会
理事長 大家 基嗣

序

夜間頻尿診療ガイドラインは、2009年4月に日本排尿機能学会から初版が出版されましたが、今回11年を経て、日本排尿機能学会・日本泌尿器科学会から第2版が改訂・発刊されました。

夜間頻尿は下部尿路症状のなかで、男女とも最も頻度が高く、また良好な睡眠を阻害することによりQOLを障害し、困窮度の高い症状です。夜間頻尿の病因は、下部尿路機能障害のみならず、呼吸器疾患、循環器疾患、腎疾患、内分泌疾患などの内科的疾患、睡眠障害、生活習慣など多彩で、適切な治療を選択するためには、病態の正確な把握が必要となります。したがって、本ガイドラインは実践的な29項目のCQに加えて、疫学、病態、診断、治療についても詳細に解説されています。

また、本ガイドラインでは一般医向けと専門医向けの2種類の診療アルゴリズムを提示しています。初版ガイドラインでは、排尿日誌は必須の基本評価に含まれていませんでしたが、昼間・夜間尿量の計測が夜間頻尿の病態評価に必須であるという観点から、第2版の専門医向けアルゴリズムでは、排尿日誌は必須基本評価として位置づけられています。他方、一般医用に排尿日誌を用いない診療アルゴリズムが提示されていますが、一般医の先生におかれましても、できる限り排尿日誌を実施していただきたいと思えます。

さらに、睡眠障害が夜間頻尿の原因になることも少なくないことから、第2版では、多尿・夜間多尿、下部尿路機能障害の治療に加え、不眠の治療についても詳細に解説しています。

夜間頻尿は加齢とともに罹患率が増加し、睡眠の障害のみならず、高齢者の転倒のリスク要因となることから、健康長寿を目指す本邦において重要な疾患症候です。本ガイドラインが夜間頻尿を訴える患者さんの診療に関わる一般医、専門医、看護師などの医療従事者に活用され、適切な夜間頻尿の診療の普及に貢献することを期待いたします。また、本ガイドラインの作成に多大なご尽力をいただきました吉田正貴委員長をはじめ委員の皆様にご心より感謝申し上げます。

2020年4月

一般社団法人 日本排尿機能学会
理事長 後藤 百万